

ニシャプールの詩人

足 利 惇 氏

ま え が き

ペルシアの詩人オマル・ハイヤーム Ġiyāṭu'd-din Abu'l-faḥḥ 'Omar b. Ibrāhīm al-Ḥayyāmī (彼は有名な天文学者であった) と云えば『ルバーイーヤート Rubā'iyāt』を思い出し、『ルバーイーヤート』と云えばオマル・ハイヤームを思い出す。しかし、その『ルバーイーヤート』と云っても、原典に接見する人は稀れだろうし、原典の訳出(邦語訳)も、第2次大戦前のもものとしては故荒木茂氏のものが一つあったのみで、戦後のものとしては昭和23年にわが友人である故小川亮作氏のものがあり、つづいて昨39年には黒柳恒男氏のものが出ているだけであるから、早くからそんなに豊穡だったというわけでもなかった。それにもかかわらず、この詩人やその詩が人口に膾炙しているのは、英人フィッツゼラルド Edward Fitzgerald の手に成る不朽の訳詩『Rubáyát of Omar Khayyám』が与って力あるによるのである。その点からオマル・ハイヤームと『ルバーイーヤート』、それにフィッツゼラルドと、この三者を組み合わせて考察することは、前二者のみを考察するよりも、ちがった意味で興味大なるものがあるように思われる。以下にかかげる「ニシャプールの詩人」はそうした視点から詩人を取扱いながら、そこに筆者の感想をも織りまぜた紀行文でもある。もともと、紀行文といっても実は昭和9年10月のもの——翌10年帰朝、秋10月30日同志社大学で発表した旧稿である。私としては思い出も深いところから恥を忍んで披露に及ぶ次第であり、読者もしその中に何か参考に資せられる点があるならば望外の幸いである。なお、オマル・ハイヤームの『ルバーイーヤート』については、本誌第7号の故 Arthur Christensen 教授の業績を紹介された伊藤義教氏の論考をも参照されたい。

ニシャプールの詩人

近代に於ける波斯文学と云へば、大体、約一千年以前に、詩人フェルドウシイが大叙事詩シャフナーメを作って以来の文学活動を指すのであって、この一千年間に、フェル

ニシャプールの詩人

ドウシイを初めとして、サアディ Šaiḥ Abū-'Abdi'llah Mušarrifu'd-dīn Muṣliḥ Sa'dī, ハーフエズ Ḥwāḡe Šamsu'd-dīn Muḥammad Ḥāfiẓ, ネザーミ Ilyās b. Yūsuf Niẓāmī, ハイヤーム等の、世界に知られた大詩人が輩出して居ります。

勿論、是等の詩人の作品は凡て幾多の歐洲語に翻譯もされ、波斯文学の珠玉として、研究者に喜ばれて居りますが、その中でもニシャプールの詩人、オマル・ハイヤームの名は殊に有名であります。ハイヤームの名は、我が国に於いても、文学愛好者の間にもてはやされ、その翻譯も数種ある程であります。故荒木茂氏が、ハイヤームの最古の写本と云はれるオックスフォード大学所蔵の四行詩『ルバーイーヤート』百五十八を全訳された以外の翻譯は、凡て重訳でありまして、而もその重訳の大部分の原本は、英国詩人フィッツゼラルドの訳詩『Rubáyát of Omar Khayyám』に拠つて居ると云ひ得るのであります。波斯文学の中には、他にも多くの偉大なる詩人があるに拘らず、特にハイヤームの名が、我が国に於いても又欧米に於いても、普遍的であると云ふのは、全く、このフィッツゼラルドの名訳に負ふてゐると云つてよいのであります。その美しい名訳は今日では、英文学中にも確乎たる地位を有して居りますが、只今、波斯語の原本と照合して見ますと、必ずしも一致的に、忠実に翻譯されたものではないことを発見するのであります。フィッツゼラルド自身に、どれだけ波斯語の力があつたかは知りませんが、彼の訳詩と云ふその大多数は、原本なる『ルバーイーヤート』から inspiration を、彼独自の詩想の中に練つて、再び作り出したものと云ふことが出来ます。彼自身ハイヤームの訳詩と云つてゐるに拘らず、その或る詩の如きは、その原本に一つの trace を見出し難きものさへある位であります。語を換へて言へば、彼の訳詩は、一つの創作と云ふことが出来るのであります。而も尚ほ、「オマル・ハイヤームのルバーイーヤート」として、世の中に称し得る所以は、英詩にそのルバーイー rubā'ī の形式を採用して、その中に波斯の exoticism と東洋風の mysticism とを表現し得たと云ふことに帰るのであります。然らばこのルバーイーと云ふ詩形は如何なるものであるかと云ふに、是は十二メータが四つから成る四行詩で *a a b a* の押韻を有するものであつて、第一行・第二行・第四行が同一の韻を有し、第三行だけがさうでないのであります。尤も、あるルバーイーの中には、時々四行とも同じ押韻 (*a a a a*) をしてあるのもあります。ルバーイーヤートとはルバーイーの複数形でありますから、ルバーイーヤートとは「四行詩」集と云ふことになりませう。ところで、そのルバーイーであります。これはもともと波斯のもので、アラブには未知のもの——イスラーム以前から波斯に生れ成長した詩形の一つであります。フィッツゼラルドの『ルバーイーヤート』の訳は、こ

の押韻がよく模倣されて居りまして、その一行を十メータに限ったところにも、その原詩の形式に近づかうとした苦心の跡が伺はれる次第であります。例へば、フィッツゼラルドの第二の詩、及びその inspiration を得たと思はれる原詩とを比較して見ますと（フィッツゼラルドの英訳は矢野峰人博士の和訳で伝えることにし、〔矢野〕と付記してこれを明らかにした）、

かはたれどきに居酒屋の
戸口を洩る声聞けば
「うちなる宮はととのへり、
などまどろめる信徒らは」〔矢野〕
朝、我々の居酒屋から叫び声が来た
「おい、我々の酒のみよ、飲んだくれよ、気違者よ、
さあ、たて、何となれば、我々は酒で杯の^{はかり}度を満さうではないか、
人々が我々の生命の度を満たすより前に」

扱て、私がここにオマル・ハイヤームを指して特にニシャプールの詩人と題したのは、外でもありません。丁度昨年（註一昭和九年）、私が波斯テヘラーンに在留中、恰も、先程申しました近代波斯語の祖とも云はれる詩人フェルドウシイの一千年祭が、首都テヘラーンに挙行せられました。その際、波斯政府は世界の波斯学者を祭典に招待したのでありますが、私も幸にそれに列席し得たのであります。列席した知名学者の外、英国の詩人ドリンクウォーター氏も見えて居りました。祭典は波斯に於けるメヘルの月、仍ち十月の、四日から盛大に行はれ、その式後、皇帝（註一Riqā-Sūh^{シヤ}）自ら詩人フェルドウシイの記念碑の除幕式に行幸になりました。この記念碑はフェルドウシイの生地である、波斯の東方ホラーサーンのトゥス Tūs と云ふ所に立てられたのであります。トゥスまで自動車で四日間の行程でありまして、私もこの除幕式に参加することになり、往還二度、ホラーサーンなるニシャプールの町を過ぎ、親しくハイヤームの墓を訪ねる機会を得たのであります。テヘラーンから、山や沙漠を幾百軒過ぎ、第三日目、その日はホラーサーンのサブゼバル Sabzevār と云ふ町を早朝に出発して、ニシャプールの町に向ひました。波斯の町はすぐ沙漠に続いて居ります。沙漠に出ると急に荒漠たる景観になって、村から村へ何十軒と云ふ距離があることも珍しくありません。段々進んで行きますと、その沙漠の沿道には、所々、フィッツゼラルドの第十七の歌には

昼と夜とを扉となせる
この^{あぼらの}荒屋を宿として

ニシヤプールの詩人

さだめの時を仮寝しつ

世々の王者ぞ旅立ちし〔矢野〕

とあり、ハイヤームの原詩には

昼と夜との斑色^{ぼんしき}の馬の休む所

又、百の王侯が一夜の夢を結ぶ所

とあるかの「キアラヴーンセライー」があります。この「馬の休む所」と云ふ表現は思想的にも実に深い背景を有して居るのでありまして、何んと申ませうか——かう長い一日の旅を終えて一夜の憩いを求める旅人（キアラヴーン）の心を、これ程適確にあらはしてゐるものはありませぬ。従つて、それは同時に人の一生を終へて永遠の眠りにつくことにも譬へられるのであります。私はこのキアラヴーンセライーについて、さうした感慨がしきりに去來致しました。遠くゾロアストラはアヴェスタ・ヤスナ第三十三章五節に、みづからを叙して

長き生命と、ウォフ・マナフのみくにと

アフラ・マズダーの住み給ふなる、アジャに至る至直なる道とに、

我れ到りつきて、(馬を)解くとき (avanhānē),

すべてのもののうちにて最大なる、御身のスラオシャを呼び求むるもの

と云つて居ります。スラオシャとは聴従、随順といふ徳目を擬人化したものでありますから、言葉をかへて申しますれば、アフラ・マズダーの高諾を願ひ出るといふわけであります。つまり宿に馬を解いて一夜の宿りをその主人に乞ふことを、その儘、人生の旅を終へて馬を主の天国に解き永遠の宿りをそこに求めることに結びつけて、うたつて居るのであります。この avanhānē はリグ・ヴェーダ第十マンドラ、第十四スークタの第九頌にも avasāna-「休息所」として葬いの歌に見えて居ります、仍ち汚れや塵やその他の不浄に「汝ら」と呼びかけ、

汝らは去りゆけよ、散りゆけよ、而して散じゆけよ、此処より。

この者にこの場を父祖らはしつらへ給へり。

日と水と夜とをもてぬられし(うるはしの)

休息所 (avasāna-) をヤマはこの者にぞ授け給ふ。

とあります。

扱つて、そのキアラヴーンセライーの形であります、それは日光で土をかためた土煉瓦の家で約百米四方の城塞のやうな形をなし、一方だけに開閉の出来る門があり、その四隅には望楼のやうなものがあるのもあります。内部は所謂中庭であつて、その外壁

に沿ふて地面より高い土間があり、人々はそこに起臥し、駱駝は中庭に坐って一夜を過すのであります。このキャラクターンセライは波斯至る所にあり、古の名君は旅行者の安全を期する為めに、何百と国中に作った話もあります。十一時頃ニシャプールに近づきました。ニシャプールの町は波斯の中世頃から栄えた町で、現在の町が、往古の町と同一の場所にあるか如何かは疑問であります。町の北方には屏風のやうに聳え立った、岩石の露出した山脈が続いて居ります。その山の麓は、その土砂で出来た緩漫な丘陵が続き、その一部にオアシスがあります。これが、ハイヤームの一生の大部分を過したニシャプールの町で、一見静かな平和な所であることが感ぜられるのであります。ニシャプールの町はホラーサーン特産の美しい絨緞や土耳其玉の出る所として名高い。低い屋根の連なる町の遠望の中に、擬宝珠形の回教寺院の円屋根が波斯の日光に光って居ります。波斯の空は実に青く、乾いた且つ澄みきった空気は、如何に遠い処を歩いて居る駱駝や人間でも、実に明確に我々の肉眼に写らせ、波斯の miniature が徒らに極端な写実的所産とのみ断ずることは出来ないことを頷かせます。我々の通って行く道は、淡黄色の沙漠の上を一直線にこの町の郊外まで迫ってゐて、近づくに従つて、段々緑の樹が一本一本、目に数へられるやうになります。柳のやうなビードの樹があるかと思ふと、必ずそこには、浅い清らかな小川が流れて居ります。波斯人に、この小川の畔程、一生を通じて、その生活に懐きさを感じさせるものはありません。樹の蔭のさす小川の畔には、二三人の波斯人が、東洋風に坐つて、茶を煮たり、酒を酌んだりし乍ら、サアディやハイヤームの詩を誦するのが常であります。これが彼等の、荒涼たる大自然の中に於ける無上の快樂であります。波斯人が古人の詩を愛することは非常なもので、私が波斯に来てテヘラーンの家庭で屢々お茶に招かれましたが、詩の話と、その朗吟とがないことはありませんでした。第十二の歌に

一瓢の飲一簞の
 食と一卷の詩書ありて
 樹蔭にうたふ君居なば
 荒野もげにや楽土なれ〔矢野〕

どありますが、これは真実に波斯人の生活欲望を適切に表現して居ると云つていいのであります。特に原書にあるやうに「私とお前とがこの荒廢の土に坐してゐることは、スルターンの多くの王領よりも遙かに良い」と云つてゐる man va tu「私とお前」と云ふ感じは、正にフランス語の toi et moi の感じを彷彿させるのであります。我々はかかる緑の樹と小川とのある郊外から町に入ります。土煉瓦で造つた四角い泥の家々の軒

ニシャプールの詩人

下には、日本流の縁台が並べてありまして、その上には美しい波斯絨緞が敷いてあります。ハイヤームの墓はこの町から南方、三軒隔った沙漠の中にあります。高さ二米程の土塀をめぐる相当広い境内には、こんもりした森があり、その森の上に例のエメラルド色の回教寺院の屋根が見えます。門を入ると、その門から正面の祠堂との間約三百米程、一段と低くなつてゐて、そこには一直線の青瓦を敷いた浅い溝が流れ、庭の中央には泉水が作つてあつて、水がこんこんと湧き出て居ります。塀の外は無限に続く沙漠であり、その中に横たはるこの静かな林園の中心に、泉水はかうして神秘的な動的な一つの存在を与へて居ります。境内には胡桃の木・白楊・杏・梅・柘榴の木が繁つて居て、激しい波斯の日光から、その日ざしを遮つて居ります。果樹園のやうなその境内の到る処、色々の草花が咲き乱れ、所謂波斯風の造園法の美しさがあります。薔薇の園には薔薇の残花が咲きこぼれて居ります。薔薇と云へば、波斯の五月は薔薇の季節で、香りも高く、花も大輪であります。我が国で「花」と云へば同時に「桜」を指すやうに、波斯では「gol」と云へば「花」と同時に「薔薇」を意味します。波斯の上流婦人の後香はこの薔薇から作った薔薇水の匂であります。薔薇が咲く時分には「ボルボル」と云ふ小鳥が盛んに囀ります。恰も梅に鶯と云ふ風に「gol」に「bolbol」は附き物で、多くの詩人に歌はれて居ります。フィッツゼラルドの第九十六の歌の一節《The nightingale that in the branches sang》の感じは、波斯の五月を知つて初めて味ひ得るのであります。波斯の春は実に楽しい。炬燵（コルシイ）の要る冬が過ぎ、冬に降つた雪はまだ山の中腹ごろ迄残つてゐますが、山の麓の丘陵や平地には、もう春が訪れて、青い木の芽が萌え、牧草が伸び、杏の花が咲き出します。波斯の正月は春分三月廿一日に始まり、是を nu-rūz 即ち新年と云ひますが、この nu-rūz は決して日本のお正月のやうに、寒さに瘦我慢をするやうなものではなく、万物凡て新しい春に蘇る幸福の時期であります。

第四の歌

ふるきのぞみもよみがへる

睦月となれば幽人も、

あこがれゆくか、花しろく

草よみがへる野に山に〔矢野〕

の心がこれであります。

オマル・ハイヤームの墓は、この平和な静かな林園の中に、祠堂の東隣りにあります。

第六十九の歌

頼むよ、おれを酒杯で養つてお呉れ

この琥珀のやうな顔色をルビーの如くにしてくれ、
おれが死んだ時には酒で洗ってくれ、
そしておれの葡萄の木で棺の板を作れ

から想はしめるやうに、最近まで小さな墓石の側には、ハイヤームの好きな葡萄がその蔓を延ばしてゐたと云ふことですが、今では堂々たる大理石に修理せられて、却ってハイヤームの面白さが失はれ、その墓土の上には、花崗岩が敷詰められて、詩にあるやうに墓土からの酒の匂を嗅ぐことは出来ません。展墓の後、この墓の裏側で我々は午餐をとったのでありますが、それに先立って、我々一行に加はって英国から遙々来た詩人ドリリンクウォーター氏は、その席上、やをらその巨体を起して、本日ハイヤームの墓を訪ふた彼の感想をのべ、その印象を直ちに詩にして、一同の前に朗吟されました。その後、引続いてフィッツゼラルドの詩中、彼自身暗誦して居たコーゼ・ナーメ（「酒瓶の賦」）の数詩をも併せ朗吟せられました。コーゼ・ナーメはハイヤームの一種の虚無的思想を表現するものでありますが、人躰はもと神が土にて形造り給ひ、然る後に息を吹込んだと云ふ思想は、波斯人共通の觀念でありまして、これを知れば、第三十七、及び八十二より九十に至る詩の意味も、おのづから明らかに理解せられるやうに思はれます。勿論、その詩の中にフィッツゼラルド自身の独創的思想も充分加味せられてゐることは云ふ迄もありません。「土で出来た瓶と、同じく土で神によって造られた瓶を作る人間との間に、何の差別があらうか。又、同じくその土で出来上った種々有形なるもの、例へば酒の杯——その杯には金言や聖人の文句等の知慧の言葉が書いてあるにせよ、又、その杯の縁に恋人が百の口づけをしたるにせよ、結局それは、僅かに杯と云ふ物の形の上に起ったことで、杯を構成する土の本質には何ら変りはない。又、かかる形をとった土を、酒に酔った挙句、腹を立てて投げつけ粉微塵に砕いたにしても、決して土と云ふ本質を破壊することは出来ぬ。人間の世界に於ける、人間同志の悪口の云ひ合ひ、憎しみ、或は愛情なんかも、本来から云へば、決して深いものではない。ただ土でこしらへた瓶としての意味が充足される時、即ちその瓶にうまい酒が盛られた時が、その土の本質が満された時だ。」と云ふ程の意味であります。我々はこの林園でかみ醸されたルビーのやうに赤い葡萄酒を掬んで、ニシャプールの詩人、オマル・ハイヤームの為めに乾杯をしたのであります。

ハイヤームのこの林泉へは、フェルドウシイの記念碑除幕式後、テヘラーンへの帰り途に再び訪ひ得る機会を得たのでありますが、一週間後のその時も、波斯の空は前と同

ニシャプールの詩人

じやうに青く、林園は同じやうに静かで、違ってゐたことと云へば、僅かに柘榴の葉が少し黄ばんでゐた位のものであります。それからはや一年——しかし一年後の今日でも、ニシャプールのかの天地には毎日同じやうな平和が続いて居ることと想察されるのであります。

あ と が き

私が三十年ぶりで昨昭和 39 年 11 月 4 日に再びニシャプールのオマル・ハイヤームの墓に詣で得たことは非常な喜びであり、一生の奇縁とも云うべきものであろう。場所はさすがに以前と同じであつたが、かつての美しい林園の様子はすっかり模様変えされ、祠堂の東側にあつたかつての詩人の墓は約七、八十メートル程北に寄せられ、墓石は新しく、かつそれを蓋う高層櫓形の超モダンな建築がしつらえてあるのには一驚した。三十年前のハイヤームの墓でも、その時には、詩人の心にそぐわないものと我々には考えられたが、この度はそれどころではなく、サアディやハーフェズの墓もそうであつたが、今日のイラン人の役人たちの感覚にはちょっとついて行けない感じがした。しかし、秋の日光は三十年以前と少しも変わらず、少しモダン化してはいるが、林泉は依然としてすがすがしい。番人の差出す芳名録に

わが一生における二度目の訪問、そして最後の訪問
と云う意味を書いて、私はこの静かな墓地を去った。

(筆者は京大名譽教授・東海大学文学部長・本会会長)